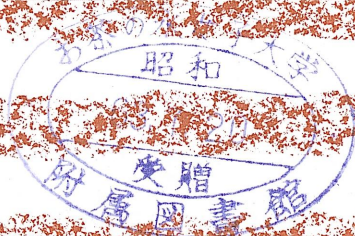


幼児の教育 第87巻 第8号 昭和63年 8月1日発行 (毎月1回1日発行) 昭和23年 4月15日第三種郵便物認可

家庭・保育所・幼稚園

幼児の教育

1988
8



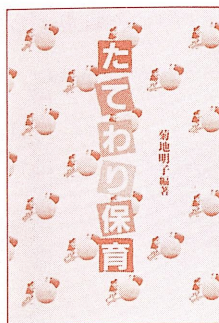
第 87 卷

第 8 号

日本幼稚園協会

たてわり保育

異年齢児保育者形態によるたてわり保育の考え方とその実践工夫をまとめたもの。



これからたてわり保育を試みる保育者のための参考となる書。

菊地明子・編著

B6変型判・288頁・定価1,600円

今の保育どこが問題？

自分の保育の誤りや考え違いは自分ではなかなか気づかないものです。そこで、自分の保育観が端的に出るとされる保育日誌をもとに、若い先生方に話しあっていたいただきました。



本吉圓子・編著

B6判・304頁・定価1,500円

子どもがつくる

—仲間とともに育つ幼稚園—

保育者が、「園の主人公は子ども」との視点に立っただけでこんなにも園生活の姿が変わってくる！ 子ども主体の保育をめざしたある園の変貌のレポート。



渡辺 明・著

B6判・232頁・定価1,300円

たんぽぽのように

3歳児保育の試み

保育することの楽しさ、そして子どものための保育を創造することの意義を、3歳児保育という枠を越えて示してくれる内容です。

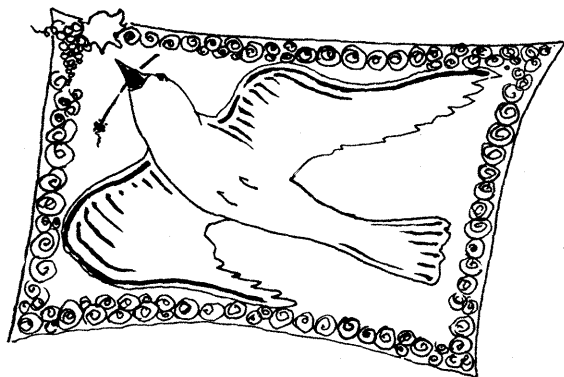
子どもたちのそれぞれの個性がぶつかり合い、ことばや、動きが、思わず笑いをさそい、子どもとともに生活することの楽しさが、ページのそこかしこに溢れています。

その中で、三歳児保育の基本とあるべき姿はキチンとおさえられています。

松村容子・江間あい・編著

B5判・144頁・定価1,300円

幼児の教育



第八十七卷

第八号

幼 児 の 教 育 目 次

— 第八十七卷 第八号 —

〔特集・緑蔭図書紹介〕

「テレビと子どもの発達」

「父の映像」……………大塚 雅彦…(4)

「下駄の上の卵」

「偽原始人」……………小池 正胤…(8)

「思い出のマーニー」上・下……………近藤 伊津子…(11)

「父 岸田劉生」……………皆川 美恵子…(14)

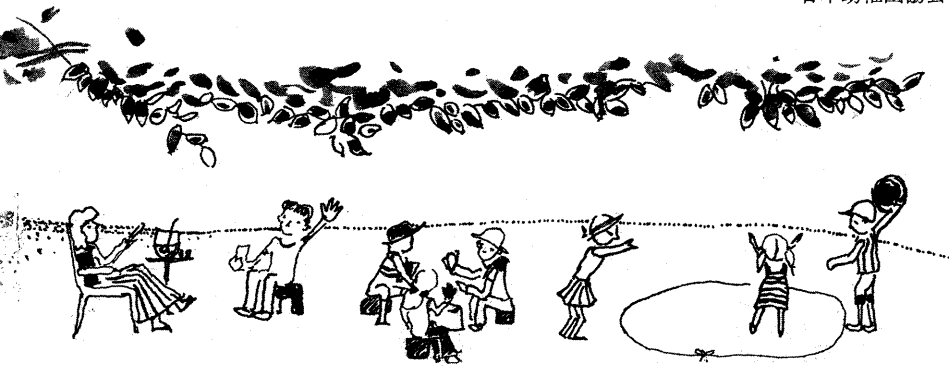
「ものぐさ精神分析」他

「モーツァルトは子守唄を歌わない」……………川崎 絵都夫…(18)

「ものづくりとヒロシマの授業」……………枝広 美穂子…(22)

© 1988

日本幼稚園協会



クラス.....津守 真...(26)

SF的読み解き 子どもという風景

第四十回 気の広がり.....堀内 守...(33)

子どもと(5)

八月・たより.....清水 光子...(42)

南の島の子どもたち(3)

父と母と子の間.....浅野 恵美子...(48)

若いお母さんたちへ

「クラス」の先生になって.....はるにれの会 川上 美子...(56)

カット・福田 理恵
編集部・向山 陽子



無藤 隆編

『テレビと子どもの発達』

(東京大学出版会刊 昭62・12)

犬養 健他 著

『父の映像』

(筑摩叢書 320 昭63・3)

大塚 雅彦

「テレビと子どもの発達」

テレビというメディア(媒体)はこんにち、われわれの日常生活と切り離せないものになっている。

NHKが一般向けテレビ放送を始めたのは昭和二十八年二月だから、それから約三十五年の歳月が流れている。ところで、子どもがテレビによってどんな影響を受けるかということは、早くからの問題であった。しかしテレビの、特に子どもに与える影響、その功罪について、ズバリと決論を出すことは実にむずかしい。無藤氏のこの本のすぐれているところは、むしろそれについて軽々しく断定することを避けていることだろう。そしてテレビのメリット、デメリットについて、実に慎重に幅広く多くの研究や議論を紹介している。つまり読者にそれを考えてもらうよう、素材を多く提供しているようでもあり、そこに学者としての配慮と良心が感じられる。編者はこの問題について研究を始めてから、ほぼ十年を経ているというが、その間に内外の多くの著書・論

文・報告書に接しているといい、本書の巻末にそれらが一括して掲げられている。それを数えてみたら実に二三四本もあり、私は一驚を喫した。今後この問題を論ずる者は、この老大な文献の幾つかに触れるだけでも参考になるだろう。

むろん編者は一応、結論めいたことも記さないわけではない。多くの研究で、テレビの影響の大きさはかなり小さいものであることが分かり、子どもに実際に接する人々の影響や、子どもの周りの環境諸々に比べれば、かなり小さく、そもそも子どもの発達において、単一の要因で大きな影響を一般に及ぼすものは極めて少ないものであり、要するに、テレビは、良くも悪しくも、子どもの生活と発達にとつての補助者に過ぎないものである、と言いながら、コミュニケーションのメディアとしての特質を、他のメディアと比較して、特に動的映像性・方向性・画一性・現時間（リアル・タイム）性の四つにおいて際だっている、とする。そしてテレビとのつき

合い方に就いて、①子どもの視聴時間を長くならないうようにする、②悪い番組を見せない、③良い番組を見せる、④悪い番組を減らし、良い番組を増やす、⑤一緒に番組を見て、子どもとテレビをめぐって話す——等を提案している。

こんにち「テレビを家庭に置かない」という信念（？）の持ち主や、つむじ曲がりの少数の人は別として、本書の「あとがき」でもいうように「時代は決定的に動いてしまっており、後戻りは難しい」。それならばむしろ、テレビをどのように扱ったら子どもによい影響を与え得るか、或いは、どうしたらテレビの影響の悪い面から子どもを守れるか等を、考えた方が賢明というものだろう。私は本書を読みながら、「月光仮面」「オバQ」「お母さんと一緒」等の子ども向け番組の歴史を思い出して懐旧の情に耽ったり、テレビの影響等について実にさまざまの研究実験が世界の各地で行われているのに驚いて、時の経つのを忘れてたりした。本書はこの問題の研究

に関する最近の貴重な良書の一つといえよう。

「父の映像」

この本は実は新刊書ではない。もとは昭和十一年六月、東京日日・大阪毎日両新聞社から刊行されたもので、それが実に半世紀余を経て新訂版として復刊されたものである。しかし今読み返してみても、あまり古さを感じさせない。むしろ、なつかしさをこめて新たな感動を与えるだけでなく、影の薄い父親・存在感の乏しい父親が少なくない今日、父親というものの存在がもっとハッキリと意味を持っている、よき時代の父子関係を思い起こさせ、それが、親と子というもののつながりの意義をあらためて再認識させる点がある。

本書のスタイルは、十二人のすぐれた父親（犬養毅・鳩山和夫・原敬・浜口雄幸・橋本雅邦・長与専斎・夏目漱石・児玉源太郎・小村寿太郎・浅野総一郎・渋沢栄一・森鷗外）が、子どもにとって（男の

子に限られているが）どう映ったかを十二人の子ども達に書かせたものである。つまり、子どもから見た父親のプロファイルというわけだ。十二人は政治家三人、実業家二人、文学者二人、軍人・外交官・医学者・法学者・画家各一名となっている。私の読後の感想からいうと漱石・鷗外のような文学者が最も面白かった。それは、私が政治家や実業家や軍人が嫌いである、という私の性癖とも関連があるのかもしれないが、書かれる対象になった人間の面白さや人柄に惹かれるのが文学者の場合、最も多いせいかもしれないし、また、書いた方の子どもの文章の上手さによる点もあるだろう。文学者というものが人間の弱さや哀しさを最も率直に現わしている、と思うのは、私のひいき目ばかりではないだろう。もっとも文学者以外でも、小村寿太郎・浜口雄幸・渋沢栄一・鳩山和夫等にも強く惹かれた点が少なくないのだから、一概には言えない。作家の城山三郎が本書の解説を書いているが、簡にして要を得ており、

これを読むだけでも、この頃の父子関係の良さがよくわかる。つまり、この本の出た頃（日中戦争の前年）は軍国主義が未だ色濃くなく、父や母がただ普通の父や母であったが、間もなく「軍国の父や母」となり、親達はまわりの気配をうかがいながら物を言う時代となり、親子の間ですら本音を言えなくなつた。だから本書を読みながら、平和の大切さを噛みしめる思いもした、という。同感である。

子どもと散歩に出た父漱石がステッキで突如目茶



目茶に子を殴りつけたが、それが病気のせいだったと後年子どもは知ったことや、後妻を迎えた父鷗外が母とこの後妻との確執に苦しみ、妻が怒っている日は子どもに「当分家に来てはいけない」と諭した話などは、私に萩原朔太郎の「父は永遠に悲壯である」という語を思い出させる。翻って思う、私の子ども達は、凡人である私を、私の死後どう描くであろうか？

（白百合女子大学）

井上ひさし作

『下駄の上の卵』

『偽原始人』

—— 親には見えない

少年たちの心 ——

小池 正胤

昭和二年の夏、山形県米沢市から二〇キロ西北に入った小松町（現川西町）に野球好きの小学六年生の五人がいた。終戦後の野球ブームはこの地の少

年たちにも火をつけていた。彼らは都会から遙かにはなれていたので、復活したプロ野球も新聞とラジオで僅かに知るだけだった。それもみんなの家にあつたわけではなかった。それだからこそ、いっそう彼らは憧れた。だが少年たちの使うグローブは軍手に藁を巻きそれをボロ布で包んだものだったし、ボールはビー玉にすいき（乾した里芋の茎）を巻き、布をかぶせたものだった。彼らの夢は、本当のゴムボールを持つことだった。地元の造り酒屋で古陶磁器博物館を経営する老人がゴムボールを持っていることを知った彼らは、それをくすねようとして失敗する。だが、ボールの入った箱の上書きの製造所の住所は目に焼きついていた。彼らはボールをもとめて換金のための米を背負い、僅かの小遣金をポケットにして家出した。汽車は占領下の社会の縮図そのままを見せながら、彼らを運んでいく。途中、とつぜん米軍大佐の私的な急用で列車後部が切り離され、米を一番多くしよった友だちのひとりだけ乗り遅れて

しまった。

東京の焼け跡と、そのうえに急造した闇市と、食べ物と、飢えた人々と、危険がいっぱいの街を彼らはただボールを求めて行く。また、乗り遅れた友達之母の結核にきくときいたストマイを探して、聖路加病院をたずねあてて断られる。危ない目になんとか会い、だまされだまされたあげく、ようやくボールを手にした少年たちは、やがてまた東北の小さな古い宿場町に帰って行った。途中で乗り遅れた友達が列車を追って瀕死の重傷をおったことを聞いた。

太平洋戦争終結翌年の昭和二年ごろ、それは、いま幼稚園から中学校の子供をもつ親たちにとって、はもはや歴史的過去になってしまった。その当時の様子は想像するのが不可能なほどに変わっている。だが、それだけに私たちはこの時代のことを語り伝えていかなければならないと思う。その時代の地方と東京、そしてことに街と人とのようすを、この作品以上に効果的に描き出したものを私は知らない。

ここでまた、この混乱と貧困と危険がみちみちている中に飛び込んで行く少年たちのひたむきな姿が感動的に綴られている。感動的とは、感傷的と違う。同情的というのでもない。少年たちの無謀さが、つぎつぎに社会とは何であるかを知らせ、彼らに広い視野を開かせていくその刻々の印象を言うのである。

いま無謀といった。しかしこれは大人たちの見方である。この少年たちは彼らなりにじゅうぶんに用意して家出をした。汽車の乗り方にも「きせる」を考えた。これは無謀な悪い乗り方にはちがいない。しかしこれも彼らの用意のひとつだった。そしてとにかく目的を達した。大人たちはおそらくあわてふためき、驚き、帰って来た子供たちを殴りとはずだろ。少年たちの心は永久に大人たちには理解されず、やがて彼らもつぎの世界へ移っていく。大人たちは子供たちのころの奥底は理解できず、子供たちもまた理解してもらおうとしない。いや理解して

もらうことを思いつかないのではないか。

こういう子供たちの世界をもうすこし現代に近づけて書いた井上ひさしの作品に『偽原始人』（昭和五一年）がある。場面を東京の近郊都市におき、小学五年の男の子数人の奇妙な日常を会話を中心に描いている。かつての野球少年たちは三十年後には、有名大学の入学を小学校から母親に期待される少年たちに変わっていた。みんな塾がよいをしながらひとはひそかに母親を殺すことを計画している。それは母親たちの圧迫にたえかねた担任の女教師がガス自殺をはかり、なかば植物人間化したことへの復讐である。彼らはほとんど牢獄に近い受験勉強への強制から家出する。しかし三十年まえの少年たちにあった家出の目的、ひとすじにボールを求めたそれはない。最後に彼らは佯狂（狂気をよそおう）を演ずる。親たちは精神科のカウンセリングを受けさせようとする。このところで大人と子供は行為として一致する。だがその間はほとんど絶望的に開いてい

た。精神病院に入った子供たちはきわめて正常に「ここに根を生やそう」と呪文のように唱え続けるのだ。

十年以上まえに書かれた作品だがいまでもじゅうぶんに考えさせるところをもってるといえるだろう。登校拒否の子供たちを精神的にカウンセリングしようとすること自体に問題があるということがこのごろ言われはじめている、と聞く。

井上ひさしの作品の傾向は多彩でひとくちにいうことは出来ない。だがその底に一貫して流れるのは不易流行の社会と人間への批評である。

ひとはどうやって大人になって行くのか。そのひとつの節目は小学校の高学年あたりだろう。この二つの作品はかつて占領軍に十二歳といわれた日本が大人になって行く節目の作品でもあった。一読をお勧めしたい。

（東京学芸大学）



J・ロビンソン作

松野正子訳

『思い出のマーニー』

上・下

(岩波少年文庫)

近藤伊津子

この物語は一九六七年に書かれ、一九八〇年には翻訳されたもので、やや旧聞に属するかもしれない。昨春、娘が中学に入った頃、娘の友人の少女たちとこの物語を読みはじめてみた。

月に一度、土曜の夜、それぞれの母の手作りのケーキ持ち寄りでお茶を飲みながら、夜の更けるのも忘れ、集い、本を閉じたのは一年経った六月であった。

あまりの緩慢さにあきれながらも、三十七章の各々を、ある時は輪読し、少女たちの涼やかな声音に酔いしれ、あるいは、内なる自分の姿を主人公と共に凝視し、ふと上げる面差しの輝きに息を呑み、十か月、物語と共に旅をしたのであった。

○

三人の少女たちは、イギリスの都ロンドンから「ふつうの」顔をして一人つきりで列車に乗った主人公アンナと共に旅立った。

少女たちはアンナより二つ三つ年嵩であろうか。

少女たちの旅先は、海っぺたの田舎町、ノーフォークのペグおばさん家と、しめっ地やしきに続く舟つき場と、入江の浜辺だった。

アンナは牧草のはえた草原と畑の広がるリトル・オーバートン、草花の咲く低い門の家に留まることになり、＼あたたかくて、あまく、古めかしい、なつかしいにおいのする部屋＼に落ち着く。

主人公アンナは、肉身との死別に続く不運のあと、施設そして里子に出された。里親は＼なんにも考えずにいる＼＼やってみようともしない＼アンナに困惑の果て、田舎の転地への旅となったわけである。

物語は、はじめに、このあたたかい、甘い、古めかしい、懐かしい匂いが、アンナの中に、少しずつ浸入していくこと、そして、この匂いこそ、この少女の今回の旅路の全容を暗示するものであることを告げている。

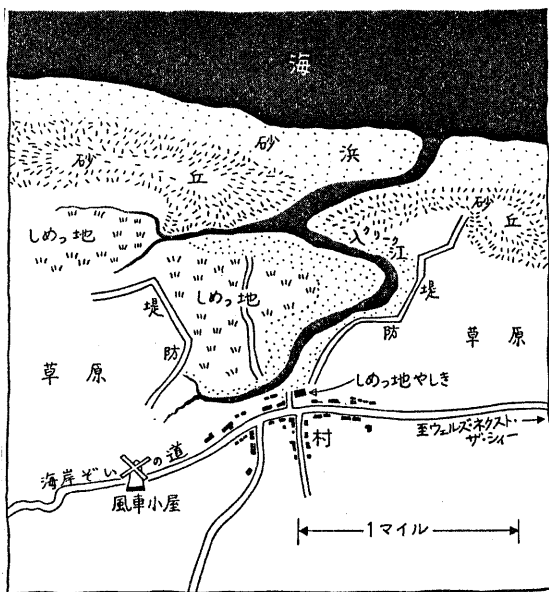
ペグさん夫妻のぬくもりのある言葉でくつろぎ、

舟つき場に足を進めた少女たちは、そこで、後にアンナと深く関わり、旅を滑らかに進行させていく一家と出逢うが、少女たちは、それとは気付かない。

入江に面した屋敷は、自分がずっと探していたような：自分が来るのを待っていたような霧囲気を漂わせ、アンナを誘う。＼だれかに見つめられているという、おかしな感じ＼があり、やがて屋敷の住人の少女マーニーと近づく。アンナの持たざるもの全てを持つマーニーであった。やがて、アンナは、置きざりにした肉身を罵り、養い親への猜疑心をマーニーに披瀝する。声はかすれ、涙を流しながら。

少女Aはこの時、病死した父に思いを馳せ、頭を垂れ、泣いた。「大きくなって泣いたの初めて」という。マーニーは、アンナ、わたしのアンナ、わたしはあなたを愛しているわ。今まで会ったどの女の子よりもあなたが好き＼アンナは気分がよくなり、心の重しを取り去られる。

アンナのマーニーによる浄化、そしてマーニーに



受容され、物語は後半へと続く。

風車小屋での事件を契機に、アンナはマーニーと決別するが、和解する。

しかし、満ち潮の中で、アンナは溺れかかり病床に就くことになる。

病床で、アンナは自らの変容に気づいていくが、

久々の外出、春は過ぎ、夏の訪れと共に、何もかも、病氣以前とは違ったものを感じる。そして、しめっ地やしきの表側を初めて見ることで、このアンナを引きつけて止まない屋敷の全貌を知る。これは、内(裏)なるところに籠るアンナから外(表)の世界へと転換していく舞台の転回である。

物語の初めに一瞬出会ったリンゼー家の人びとの再会、しめっ地やしきを画布に描く老婦人ギリとの交流、そして、再び彼らから受容され、信頼と愛の絆を結び、アンナの変容めざましく、物語はめくるめき終りに近づく。

春から夏の終りまでの半年の物語は、思いがけない登場人物たちの環状の繋がりを語り、めでたく大団円となる。

共に旅した少女Aは「初めのアンナには半分共感した。次第にアンナの成長と共に重なっていく自分を感じた。おしまいのアンナはすてき。」という。

少女Bは「アンナの成長についていけなかった。初めのまゝのアンナに今も最も近い自分を感じる。」という。

少女Cは「自分とそっくりの人としか話せなかったアンナが、違う人たちと微笑みあうことができるようになった時うれしかった。わたしもそうだった

から。私もこの一年であまり知らない人たちとも近づいて話してみたいと思うようになった。」という。

読み手の少女たちは、アンナと共に旋律を奏でる者として旅をした。少女たちの、この先、たゆとう旅は幾たりも遍路をめぐるに違いない。

(かっこう文庫主宰)

岸田 麗子著
『父 岸田 劉生』

(中公文庫)

皆川 美恵子



藍色のちぢみの浴衣を着て、赤まんまの花を手に持った麗子五歳の肖像——画家劉生の数多くの麗子像の端緒となった、童女麗子の画をカラー・カバ―にした、『父 岸田劉生』が中公文庫に登場した時、私は、さっと手をのばし、宝物のように小本を掌中にした。原著は、昭和三十七年雪華社から、武者小路実篤の序に飾られて出版されている。さらには昭和五十四年に読売新聞社から復刊もされている。

麗子像とは、私にとって気にかかってならない子ども像である。もう何年前のことになるだろうか、竹橋の国立近代美術館で岸田劉生展が大がかりに開催され、画業を目のあたりにしてからというもの、劉生にとっての麗子は何であったのか、いつかゆっくり麗子について想いを馳せてみたいと、その神秘的な子どもの謎ときを密かに憧れ続けてきた。麗子さん御自身による父の回想記は、そんな憧れを抱く私にとつて、とりのがすことのできない本として、私

の前にひょっこり現われてきたのだ。

麗子さんは、父のモデルとなった時の思い出をこら綴っている。

「父はモデルの時にはいつも気をつけて、『くたびれたらいうんだよ』といってくれる。そしてよく、くたびれたかい、と途中でもきいてくれる。くたびれていけば『うん』とうなずき、くたびれていなければ、『まだ大丈夫』という。あんまり長く坐っていて足が痛くなつて『お休み』になつたこともたびたびあつた。

ある時やはり長くじつと坐っていて、もう足の痛さが我慢できなくなり、父の方を見た。画室の中は父の動かす筆の音が聞こえるかと思うほど静かだ。私は『もう足が痛いからお休みにしたい』という言葉をのみ込んでしまう。私はじつと足の痛さをこらえている。すると涙が目に溢れてきて今にも頬をつたって落ちそうになる。涙が落ちたら父は気がつくだろう。子供心にも父の仕事の中

断させたくなかった。私は父に気づかれないようにソリーと上をむく。天井をにらんで溢れる涙がひっこむのを待つ。父はなおも一心不乱に着物の柄を描いている。

そのうちやっと父の仕事が一段落のところになり、お休みになる。父はよく私が泣くのが可愛いといつて、可愛想なお話をして泣かしたりして喜んでいたが、こんな辛抱をして私が涙を隠したことは知らなかった。」

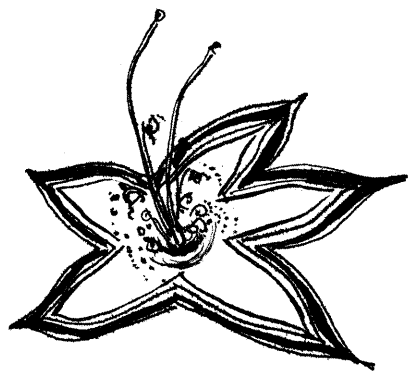
麗子像から受ける強烈な印象は首（こうべ）に、それも眼に際だつていよう。モナリザもひき合いに出来る麗子の微笑。その微笑をたたえた顔立ちには、しかし、けなげな涙を隠し続けた子どもによって支えられていた。どうしてか麗子さんは、他にはモデルとして立ち続けた思い出を語ってくれてはいない。大部分は、父のつけていた日記をもとに、父の仕事の足跡をていねいに辿るということをおこなっている。

たとえば麗子像に関して、一九二〇年八月十一日の日記「……十二時から麗子の肖像にかかったがどうもむつかしくてよわった。無形の美、生きた感じをぢかに画布の上に弥が上にも露骨に出したい。美術の本領はこの無形の『美』にあつて物を如実に再現する方の仕事は客にある。写実はこの二つの最も有機的な合一にあるが、しかし美術には写実以上のものがなくてはならない。物に即した美の中に、或は上に宿る『深さ』『無形』である。……」を紹介する。

麗子の毛糸の肩掛け、あの赤いしぼりの着物。衣裳である毛糸やしぼりのしぼしぼの、もりあがる材質感の写実は目をうばわれるほどである。しかし、麗子の顔は、「一見して人をうつ」「深い力」に満ち、人をひきつけてやまない神秘をたたえていよう。古代エジプト人のような横向きの顔。細長く美しい、異界を見つめているかと思われる、ツタンカーメンのような眼（まなこ）。劉生は、あくことな

く麗子という子どもの顔を描き続けた。麗子は、芸術家である劉生がはらみ、生み出した子どもの形をした怪物であつたろう。

私にとって最も不可思議で、展覧会場でも長く立ちどまり続けたのは、『二人麗子飾髪図』であつた。ここでは、さらにもう一人の麗子が登場し、その麗子が手鏡をのぞきこむ麗子の髪を梳き、そのあと紐を結び、椿の髪飾をつけようとしている。白い足の、そのもう一人の麗子は、あきらかに妖怪めいており、二人の麗子は、もうこちらへ視線を向けて



はくれず、髪という奇怪な生命をもてあそびながら、異界でむつまじく華やいでいるばかりである。

『初期肉筆浮世絵』で「デロリとした美しさ」と至言を放った劉生の、その美しさを、私はこの二人麗子に感じ続けている。デロリとした女兒にうつしとられる麗子は、父によって、愛称デコちゃんと呼ばれていたことを知った。でどうしたと言われればそれまでだが、私はそのことを知って、この小本を読んだ醍醐味を密かに味わったのであつた。

(十文字学園女子短期大学)

岸田 秀著

『ものぐさ精神分析』

『幻想を語る』

『嫉妬の時代』

森 雅裕著

『モーツァルトは子守唄を

歌わない』

——『壊れた本能』と

『江戸川乱歩賞』——

川崎絵都夫

東京都交響楽団のメンバーの方々と幼稚園での音楽会の仕事をするようになって三年。その度に園児達の無邪気な笑顔と、音を聴く真剣なまなざし、子供達に良い音楽を聴かせたい」という先生方の情熱に、こちらの方が感動しながら編曲、作曲でお手伝いをしています。(その縁でこの原稿を頼まれたのですが、僕自身は、音楽そのもので受けた感動の方が、音楽書を読んで受けた感銘を大幅に上回っているので——あたり前かな?——音楽書の紹介は今回は、しない事にします。)

そして話は突然、大学時代に遡ります。

夕暮れのターミナル駅前の喫茶店で勤め帰りのサラリーマンに交じって、心理学や現代思想の話に夢中になっている青年二人。そのうちの一人が僕なのですが(?!)主に友人にレクチャーを受ける形で、何度となくそういった場をもちました。というのも、音楽における感動とは何だろう、という疑問

や、中学の頃からあった「人間」に対する興味などから、人間の基本的な精神の原理、成り立ち、人間の普通の普遍的な精神構造などを心理学者、思想家は、どう考えているのかを知りたくてたまらなかつたのです。まあ、その友人（心理学科）にしてみれば、人に教えながら自分でも考えをまとめたり、復習した、という部分もあったのでしょうが……

そしてその時に知ったいろいろな理論に、今ひとつ納得できなかった僕が、正に驚天動地、目を開かれた（人によっては目からウロコが落ちたりするアレです。）本が、岸田 秀氏の一連の著作でした。

「人間とは本能が壊れた動物である」

「全ては幻想である」

要は、これだけです。これを根本理念として人間に関するあらゆる事柄を説明してしまおうわけです。でもこれでは訳が分かりませんね。例えば「教育と必要悪である」これを岸田氏自身の言葉に少し補

足を交じえて説明すると……。（「内が岸田氏の文章」）

まず人間は何らかの理由により本能が壊れてしまった。正確には、本能を行動に移すための行動様式が壊れてしまった、とします。（これは、人間の直立歩行による生物学的早産が原因とする説もあります。つまり自らの本能に従って行動できるような身体が発達を整わないうちに生まれてしまう為、という訳ですが……）

そこで「本来の行動様式の代用品である行動形式を人為的につくって個人個人にはめこんだのが文化である。」そしてその文化の中にあつて、教育とは「本来、人間のもつさまざまな方向への可能性を摘み取り、押えつけて……人間を社会に役立つようなパターンに入れること」ゆえに、教育されている側からすると、「必要悪である」となります。しかしこれでは、ミもフタもない、という感じですよ。

岸田氏は、さらに「教育は必要悪なんだ……という

自覚があれば、教育者も子どもを教育するとき謙虚な気持ちで臨むでしょうし、強制に従わない生徒に對しても寛大な態度が取れるでしょう。また外れ者を許容するゆとりももてるでしょう。しかし子どものために教育してやっているんだ、この教育に従うことが子ども自身のためになるんだと思ひ込んだとたん、教育者は、子どもの気持ちを感じ理解するいっさいの可能性をみずから閉ざしているのです（「おまえのためにこんなに努力しているのに」と思うから、なぜ生徒が言うことを聞かないか、の理由がすべて見えなくなってしまうのです）」

と述べていて、ここに至って氏の、教育される側と子供たちへの深い愛情、共感、思ひ込みで何かを強制されることへの怒りが見てとれるのです。

氏はこのような調子で、前述の二つの基本理念を元に「性について」「何のために親は子を育てるか」「自己について」「怒りと憎しみ」「忙しい人とひまな人」など人間に関する事から、歴史・文化・

国家・言語の起源などの広い範囲について鋭く論じていきます。又、各分野の方々との対談集にも、伊丹十三氏との自我論的教育論など、興味深いものが多々あります。そして……。

欠点その一。あまりのめり込むと、全てが思ひ込みなんだ、と思ってしまう、何をするのも虚しくなること。（ただし、それも思ひ込みだ、ということに気づくと回復します）

その二、あまりにアッサリ断じてあるので、「そりゃそうだけど……あんまりじゃない!?」と言いたくなること。

その三。読者自身の心の中に人間に對する愛情や、情熱がない場合、単なる割り切りだけの、冷たい性格になってしまう危険があること。

効能（これは伊丹十三氏の言葉を引用します）

○気が楽になる。

○争いの心が消える。

○物事がクッキリと見える様になる。

さて、こう暑いのに頭を使う本を読んで疲れてしまったら、講談社文庫から出ている（予定の）森雅裕著『モーツァルトは子守唄を歌わない』をおすすめします。

この森雅裕氏とは、何の因果か、ではなくて縁か、大学時代に寮で相部屋でした。森氏は当時、いろいろな職業を転々としたあと、作家になる為の経験の一環と、学歴欲しさで、二十六歳にして大学に入学。周りの学生達の怠惰な生活に呆れ果てて怒りまくっており、とてもおっかない人でした。

しかし、そのような人が書いたとは思えないような、軽妙にして痛快な登場人物達が、縦横無尽に活躍する推理小説です。何せ、モーツァルトの死の謎をベートーヴェンと弟子のツェルニーが、掛け合い漫才的会話をしながら解いていく、という奇抜なもので、大変楽しめます。ちなみに作者は、この作品で第三十一回江戸川乱歩賞を受賞し、めでたく作家

として世に出、四畳半のアパートから3DKのマンションへ引っ越すことができたのです。（あやかりたい、あやかりたい）

（作曲家）



小島靖子
小福田史男 編著

『ものづくりとヒロシマの授業』

八王子養護学校の実践

(太郎次郎社)

枝広美穂子

この本の大半は、衣食住に関する「ものづくり」の懇切丁寧な説明に費され、詳しい作業の手順、豊富な写真と図解によって、実践に活用できるように

編まれています。

食 一、小麦刈りからうどんづくりまで

二、地引網から干もの練りものづくり

三、テングサとりから寒天づくりまで

衣 一、養蚕から絹織物へ

二、原毛刈りから毛織物・毛布づくり

住 一、原木の伐りだしから椅子づくり

二、丸太を組んで隠れ家づくり

三、木や竹で臼・木鉢・ざるづくり

これらの項目でお分かりのように、「できるだけ原料から」という先生方の思いが貫かれています。食の大部分を海外に依存し、手仕事は風前の灯という現在の日本の状況の中で、この思いを実行するのは容易ではありません。道具作りからはじめたり、作り方を知っている人を探したり……遠くから近くから暖い手がさしのべられます。小麦畑を提供する堀口さん。石臼を下さる内田さん、粉ふるいを作る斎藤さん、手とり足とり教えて下さる数限りない

先生が登場します。

「できなければ手伝ってあげるよ。なあに、そのうち一人でできるようになるさ」常にはほえみを浮かべ、あせることもなく、淡々とみんなと一緒に仕事をする真綿づくりのおばあさん。担任のいうことはなかなか聞かないような生徒達が、おばあさんの言うことは素直に聞きます。初めて養護の子に接し、戸惑う堀口さんに「私たちに話をするように話してください」とお願いする先生。リヤカーによる倒木運びをみるにみかねて、トラックやショベル・カーを出してしまう工事場のおじさん、加藤牧場のおじさん、戸田の干物工場のおじさんおばさん、テングサとりの金崎おじさんなど——そこでは、子どもも教師も全く同じ立場で、感動したり苦労したりしながら、共に学びあいます。

それにしても、八王子の先生方の決して、あきらめない、懸命な姿には舌を巻きます。電話帳で調べる。「ある」と聞けば、早速バスで出かける。重い原木

の鉢を、新潟の村から（八王子は東京）代わる代わる抱いて持ち帰る。夜九時に再び登校し蚕の世話をする。糸とりのできる人を訪ね歩く。学校に職人さんを呼んで来る。この行動力。おまけに、教室中粉だらけになっても、粉の気持ちよさによって、ものに対する感性が磨かれてゆくとはほえみ、何もなかった子に対しても「力仕事はできなくても、みんなの活動を見ていて、みんなの作った遊具にのろうとして出てくるのだ。いねむりもいい。」という抱容力。そして、好奇心一杯で工夫に怠りなく、ある時は、生徒そっちのけで夢中になってしまう愉快な先生……この飾り気のない姿こそ、子ども達にやる気をおこさせ、作業にのめりこませる源に違いありません。子供たちは「ガンバレ」「しっかり」とか叱咤激励によってではなく、一緒に汗まみれになる先生によって、心をゆさぶられ体を動かすのです。

又、「ヒロシマの授業」でも、生徒達はヒロシマ

と真正面から取り組んでいます。

この「平和の授業」は、丸木美術館（埼玉県東松山市・原爆の絵の展示）、アニメ「はだしのゲン」、映画「おこりじぞう」鑑賞——被爆体験者の手記の読みきかせ——八王子大空襲における父母の体験談を聞く——ヒロシマへの修学旅行（資料館見学・被爆者の話を聞く）という過程で進められます。その中で、原爆病院から、養護学校の子らはどうせわかわらないだろうと見くだして、人の紹介を断わられたりもします。

が、この学習は教師の予想をはるかに超えたり、ねりを生み、被爆者に対する共感の中から、子どもたちの声が上がります。

「差別って私たちにも関係あることだよ。私たち、やらないうちからできないと思われている。だれだって何かできることはあるはずだ。何かいわれたら言っていた方がいい。言えない人もいるから、みんなで言っていた方がいい。私はヒロシマで生き

かたを覚えてきた。」（恵子さん）

「実は僕は台湾人だ。今まで恥ずかしいと隠してきた。でも、被爆者の話を聞いて、隠しても仕方がないと思った。オレの名前は楊。すばらしい名前だと思おう。」（広クン）

「へいわをかえせ？ かえせはへんだ。へいわをつくらう！ つくらうだよ」（木村君）

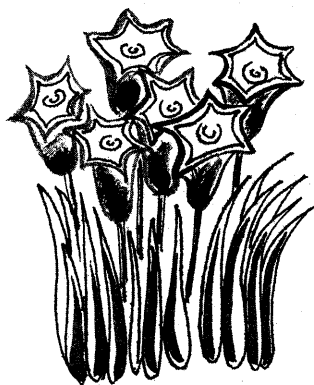
その後、大学に進みたいと希望する高三7名による都立大での「ヒロシマから学んだもの」というテーマの合同授業の中でも、彼らは、打って出ます。

この時の事を、ゼミの小沢教授は次のように書いておられます。

「大学は何のためにあるのですか」と聞かれ、私は返答につまった。養護学校の子らを研究対象とすることはあっても入学は許さないような大学とは何であらうか……

養護学校の子らは、「所有すること」をめざす生

き方をとれない。そうした価値感のもとでは抑圧されるのみである。高い学歴やポスト、多くの財産、こうしたものを所有することをよしとする価値感、これに見あった喜びかたにしばられているかぎり、自分をいやしめ殺していくしかない。そうでなく、「人として生きあう」という生きかた・価値感、これにあった喜びかたをすることによってのみ、人間として生きてゆけるのである。自分だけでなく、自分とかわる他者のすべてが、こうした価値感・学



びかたをすることによって、自他の共存が可能になる。むしろ、「人として生きあう」ほうが、はるかにラクに生きられる。養護の子らは、このような生きかたをしませんかと、近い位置にいる私たちに声をかけているのではないだろうか。

この子らの純粋な声に、私も深く耳を傾け続けてゆきたいと思いました。

(はるにれの会)

クラス

津守 真

高い所の上って、遠くの方を眺めている子どもがいる。何を見ているのだろうか。空を走る雲か、子どもたちのざわめきか。はじめてつきあう私をまともに見ようもしない、その子どもの心情を推し量るゆとりができたのは、四月から一月も経ったこのごろである。それまでは、高い所の上るのを好む子どもだぐらいにしか見る余裕がなかった。

新しいクラスをつくる新学年は忙しい

四月、新学年のはじめ、新入生たちが入ってくる。私の学校にも、今年はいつもの年よりも多くの新しい子どもが加わった。私の担当するクラスでも、以前からの子どもも大人の手をしっかりと要求するし、どの子のことも気にかかって、毎日をあわただしく過ごした。クラス担任でないフリーの立場だと、最初から深く交わってゆけるが、担任となると、だれかとゆっくりと過ごすことができな

い。ひとりの子どもとつき合っている、はじめての子どもがどこかで不安になっていないかと気になり、ちょっとでも手のあいたときには、あちこちと走りまわってしまう。一日を終わったとき、だれと何をしたのかも思い出せない。私の方から、落ち着かない雰囲気をつくり出している。これは、担任が全部の子どもをみてゆかねばならぬ、クラスという制度をつくっているからではないかとも考えてしまう。だが、もしもクラス担任制がなかったら、だれの目からもぬけてしまう子どもが出てきはしまいか。そんな考えの間を揺れ動きながら、現実にはクラス単位をもとにして学校は運営されているから、自分たちに与えられた子どもと親たちと、できるだけ万遍なく交わろうとする。だから、新学年のはじめは担任はこの上なく忙しい。

担当の保育者がいることにより子どもは育つ

クラス担任になると、私とその子どもたちの安全を守り、毎日の生活を共にしなければ、だれもほかにそれをする人はいないというひきしまった気持ちになる。ひとりの子どもが育つには、その子どもに継続的に細かく気を配る保育者を必要とする。どの子どもについても、だれかが一人の大人に複数の子ともであるが、責任をもっていなければ、ひとつの学校や園は成り立たないだろう。それがかならずクラス制に結びつくのかどうかは分からないが、クラス担任制はこのような必要からつくられたのだろう。

クラス所属が子どもの見え方を決める

担任になると、自分のクラスの子とも他のクラスの子ともを区別して見てしまう。そんなことはあってはならないと考えていても、他のクラスの子ともが泣いていたり、ひとりで寂しそうにしていると、そのクラスの担任は何をしているのかと思ったりする。たとえわずかの時間でも、それを見た人がそこにかかわれば全体がどんなに良く動くかと思えるのに、大人の助力を必要としている子どもでないとそのことに気付かない。クラスの枠が最初から先入観をつくっている。ある子どもをどのクラスに所属させるかは人為的に決めることで、そのことが見え方を変えるのだから、その人為性は子どもにとって運命の分かれ道にもなる。

私のクラスに、他のクラスの先生を好きな子どもがいて、その子は大半の時間をその先生の傍で過ごしている。私はその先生に「すみません」という。だが考えてみれば、その子はこの学校の子どもであり、その子がその先生を選んでいるのだから、私が詫びることではなさそうである。逆に、私のところで多くの時間を過ごしている子どもは、クラス所属がどうであれ、その子の必要に私はこたえるのであって、それはあたりまえである。昨年の中頃、他のクラスの子どもで私を独占したい子がいた。その子のことはここにも記したが、もしもクラス所属が違っていたら、その子と私の悩み方は違っていただろう。クラスの枠が、大人の子どもに対する知覚を変えるのだ。

この点では、担任からフリーの立場だと、純粹にある子どもが必要によって応答することが許される。ひとつの学校や園には、どのクラスにも所属しない大人が必要なのだと思う。そんな大人が何人もいたら、随分と良いことだろう。

大人同士の相互状況知覚による保育

私共は複数担任なので、それぞれが子どもにぬけのないように気を配り、大人同士が相互に理解し合って保育することに慣れてきたとき、私も次第にひとりの子どもとゆっくりとつき合う時間が増してきた。自分がみていない子どもを、だれかがしっかりと見ているという安心感があると、私も眼前の子どもとしっかりとつき合うことによって全体が成り立つのだとの認識になる。その場合、ある大人の担当する子どもを決めるのが必要なこともあるが、固定的関係にはまらず、むしろ大人同士の相互状況知覚によって臨機応変に動くのが自然であるように思う。子どもがだれを選ぶかということもあるし、偶然の出会いが私をある子どもに結びつける。また、子どもは一日の中で移動するから、ひとりの子どもはいろいろな大人と交わることになる。私はそこに保育の場の特徴があると思う。

相互状況知覚による連携プレーは、特定のクラスの担任の間だけでなく、他のクラスの大人にも及ぶ。クラス担任は明確にあるのだが、クラスの枠はゆるやかに考え、学校全体の大人たちが互いに補い合って全体の子どもをみるという相互理解がその基盤にある。

四月の末頃になると、幸いなことに、私共の学校には実習生が参加してくれるので、実習生がこの共同の保育の動きの一員となる。それぞれが、自分の周囲の子どもたちと大人たちの状況をみながら自分の動き方を判断するようになると、全体は一層円滑になる。

養護学校の保育の場では、大人の人数を多く要するのだが、普通の保育では、子どもたちが互いに保育者の働きをするのではないだろうか。また、小さい時から、人間関係の状況の中で自分で考えて動くこと、すなわちある意味で相手を育てることができるようになることは、保育や教育の大きな課

題なのではないだろうか。それは幼いときからの民主的な保育の場中でなされる。

保育者の人数と母親の参加のこと

先日、英国の O M E P から訪問者があった。その人たちの第一の質問は、日本では新入児は四月に一斉に入園するのかとの問いだった。英国では月ごとにその月の誕生者が入ることだった。日本でもこうすれば新学年の混乱はずっと緩和されるだろう。それには長い年月がかかるだろうが。

先日、母親たちの懇談会で、欧州から帰国したばかりの人が、フランスの学校では母親がクラスの中に入って手伝うのは普通だと語った。このことは世界の各国でごく普通に見られることである。この席にいたひとりの親がこの話に感銘を受け、学校の先生はそれを職業としてはいえ、多数の子どもを預って大変なのは分かっているのだから、わたしたちもお手伝いしなければ申し訳ないと語った。日本の親たちは学校にすべてお任せするといふ態度で、何か落ち度があると学校の責任にするのはどうかと思うと感想を述べ、いつの日か自分も余裕ができたなら、小さなことでもいいから学校でお手伝いできるといいと話した。私共の学校では、親から離れると不安になる子どもの場合には、一年も二年もクラスに入っていることは珍しくなく、そういう親は次第にいろいろの子どもに関心を持ってみてくれるようになる。親にとっては良い教育の、学校にとっては良き理解者を得る機会であると思う。しかし、外国のように、親を常時のヘルパーとなし得るかどうかにはいくつもの問題があるだろう。

その英国の訪問者に、日本の幼稚園の設置規準は一クラス四〇人であると話したら、外国人と話したことのある多くの人が経験しているように、論外だという顔つきをされた。

一人の大人が気を配って保育することのできる人数には限度がある。ひとりひとりの子どもと余裕を持って交わることを可能にするだけの大人の人数をそろえることは、保育の質を向上させるための前提条件である。管理者にとっては困難な厳しい課題である。

子どもはいろいろな人と触れることにより成長する

クラス担任は、所属する子どもたちのすべてに気を配り、そのことに多くの労力と精神力を使っている。自分がその子たちのことを一番よく知っていると思いがちである。そのことがひとつのクラスを閉鎖的な密室にする。担任の観点からの思いこみが子どもを見えなくすることもある。

私の担当のある子どもは、大人が困ることをするのが好きである。私はできるだけその子のしようとすることに協力するつもりでつきあうのだが、もし何か事故を起こしたら私の責任と思うと、何かがあれば直ぐにゆける距離で監視する関係になっている。ある時、その子どもが他のクラスの先生と追いかけっこをして、私との間では見られない笑顔をみせているのに気が付いた。クラス担任としての私の存在も必要だが、担任の枠にはまらない人との交わりの大切さを知らされる。

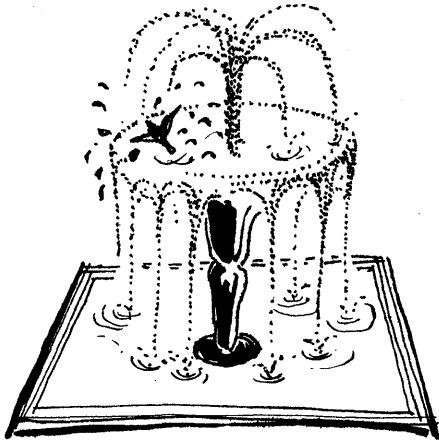
担任制をとっている場合、自分と子どもとの関係を閉鎖的にしてしまわないように、更に他の人々との関係へと開かれるようにすることも、担任の重要な仕事の一つと思う。

それぞれの子どもが、活力を持って、自分の仕方できていることが保育の質を決めるバロメーターである。制度にはそれを守る面と、それを妨げる面とある。クラス担任制があるおかげで、私は自

分の力の及ぶ範囲の子どもと丁寧に交わることができる。反面、そのために、自分をも子どもをも必要以上に束縛している面があることにも気がつく。制度は人間を生かすためにあるので、子どもが制度のためにあるのではないという原点に、常に立ちもどろう。

今回、私は、学校や幼稚園の先生なら、誰でも当然知っていることを記したのではないかと思う。私は、長年子どもの仕事をしながら、クラス担任として子どもに接したのはじめてである。この点では晩学であるが、この経験によって、大人と子どもとの関係を成立させている社会的基盤について考えさせられている。

(愛育養護学校)



S F 的読み解き

子どもという風景

第四十回

気の広がり

堀内 守

元気あり

「元気よく」とか「元気がない」などという。「元気」は日常よく使われることばである。のみならず「元気があ
るのはよいことである」という肯定的な文脈で使われて
いる。

語る人も、聴く人も、「元気」がどんな状態をさして
いるか、わかり切っている。

「元気な子」。まるでどのような子であるか、直観的にわ
かるような気がする。

ではどういう状態が「元気」なのか。いざ説明する段
になると、ほとほと困り果ててしまう。わかつてはい
る。が、説明できないのである。いろいろ試みても、う
まくいかない。ええ、面倒だ。大体、わかっていること
を説明できないなんて、言葉の限界なんだ。そういつ
て、言葉にゲタをあずけてみたり、自分の語彙の不足に
苛立ったりする人もあろう。中には、そんなことやめ
た、と中途で放り出してしまいう人もいる。いてもおかし
くない。

でも、おかしい。一日に何回となく使っているのに「元氣」を説明できないとは。少し元氣を出して、「元氣」を調べてみることにする。

辞書を引いてみると、いくつかの用法が載っている。用法にも順序があつて、第一に紹介されているのは原意の方である。それによると、「①天地間に広がり、万物生成の根本となる精氣」とある。日常の用法とはかなりへだたっているが、神話的・宇宙論的でスケールが大きい。「②活動の根本となる氣力」となると、日常の用法に近づいてくる。でも、まだまだピンとこない。「③健康で勢いのよいこと」が最後に出ている。思うに、これがフツーに用いられているものだろう。わかりやすい。と、肯定してみたあと、何だかさみしいのに氣づく。だって、日常使われている「元氣」は、こんなレベルのものではなく、もっと光や色や艶があり、びちびちしているのに、この説明ではそれらがあっさりと消されているからだ。何か氣になる。

見直せば、②や①の説明もしかるべき理由をもってい

るように思えてくる。

氣の古層

古代ギリシヤのアナクシメネスは、この疑問に答えるような一節を残している。それによると、「われわれの魂が空氣であつて、われわれを統括しているように、氣息（プノイマ）、すなわち空氣が世界全体を包擁している」（山本光雄訳編『初期ギリシヤ哲学者断片集』、一九五八年、岩波書店、十一ページ）である由。わかった？ 氣息と空氣と魂とは同じもので、万物の元素であり、生成の原理であるというのである。

「断片」だから、いろいろに理解される余地がある。が、この中に流れているのは空氣一元論である。そして、空氣が薄くなると火になり、收縮すると靈になり、さらに凝縮すると水になり、もっと收縮すると石になる、というように空氣だけで何でも説明してしまう。

今日から見ると、だいたいかがわしいように見える。

「元氣」の底にはこのような考え方が沈んでいて、時ど

き思いがけない形をとって現われることもある。たとえばインドの思想の古典ともいふべき『ウパニシャッド』(「対応」というような意味である)には、ミクロコスモス(小宇宙)としての人間とマクロコスモス(大宇宙)としての世界とが等置され、解説の道が説かれている。その中で「我」は「アートマン」と呼ばれている。その原意は「呼吸する」である。「呼吸」が「生氣」を意味し、また「自分」をも意味するわけだ。ついでながら、ドイツ語では「呼吸する」ことを「アートメン」というから、以上の話を古い話と見なすだけではもったいない。これらは、呼吸を中心に、精神と身体とを結びつけて考えていたことを示すものである。呼吸運動がヨーガとどのような関係にあるか少し参照しただけでも理解されよう。

子どもがよく眠っている。「すやすや」と表現する。その「すやすや」は、呼吸より来ている。

中国思想によると、「氣」は自然現象の「はたらき」である。「氣」は呼吸によって体内に入り、外にある

「氣」と体内の「氣」が感応する。日本語の「すやすや」も、このような感応を背後にもっているらしい。そうでなければ、「すやすや」という表現から来る安らぎは説明しにくいだろう。子守歌のうち、子どもを眠りにさそう種類のものにはこういう安堵をテーマとした感応を表現したものが多い。

氣になる「氣」

古層のことは通常は忘れている。日常場面では「氣」はもっと気楽にたくさん使われている。「元氣を出して」とか「元氣よく」よりも、そのグループは多様である。しかも文脈はさらに多様だから、一筋縄ではとらえきれない。

氣丈、氣化、氣分、氣圧、氣付、氣合、氣宇、氣色、
氣炎、氣性、氣泡、氣味、氣前、氣品、氣風、氣骨、氣
息、氣配、氣脈、氣転、氣運、氣象、氣絶、氣量、氣
慨、氣勢、氣樂、氣管、氣鋭、氣質、氣魄、などなど。

また、氣を下にもつ名詞として――

人気、才気、士気、心気、天気、正気、血気、志気、

夜気、殺気、活気、勇気、根気、病気、堅気、勝気、覇気、などなど。

動詞になると、「気」のあり方はもっと多様になってくる。それを大別して八つに分けてみるができる。

- ① 全般的に精神のあり方を示す。「気を静める」「気がめいる」。
- ② 折や事にふれてはたらく心の端々。「気がきく」「気が散る」。
- ③ 持続する精神の傾向性。「気のいい」「気が長い」。
- ④ 起動因。「気がない」「気が進まない」。
- ⑤ 関心。「気が進む」「気を引く」。
- ⑥ 持続力。「気が尽きる」。
- ⑦ あれこれ考える。「気をもむ」「気にやむ」。
- ⑧ 感情のあり方。「気まずい」「気を悪くする」。

以上をさらに「元・気」の側に近づけてみると、「気」の相は、日常場面の裏側に深々と広がっているように見えてくる。何と「気」はたえずくるくると姿を変えているのである。変えているのがその恒常的なあり方である。

生存の根本

古い時代から「気」は生存の根本であると考えられてきた。さまざまな隠喩にそれが出ている。今日から見ると荒唐無稽のように思われる説明でも、あっざりと捨て去るには惜しいようなふくらみもっている。たとえば「気がつく」を例にとるなら、そこには幾重ものレベルの意味が読み込まれているのがわかる。

一方には具体的な何か、という個別的なものに「気がつく」という言い方がある。お金^お金が落ちていのに「気がつく」などがその典型的な例である。ところが、他の極には、それまで気を失なっていたのがようやく「気がつく」というようなレベルのものがある。まわりの人びとの安堵の吐息がきこえてくるようにも感じられる。息を吹き返すという表現がこれと感応していると見てよいであろう。小児の場合、突然引きつけを起こし、全身を痙攣^{けいれん}させることがままある。まわりの人びとは「気が気でない」状況で、「気遣い」、「気もそぞろ」でいる。そこへ、「気がついた」という一報が入る。雰囲気は一気

に変わって、あたりの気配もゆるんでくるだろう。

安心した人のなかには、それまでの気分が突然に変わったものだから、気が遠くなるように感ずる人も出てこよう。

善悪の彼方

そのレベルの近くには、よいとか、悪いとかの評価的な判断にはなじまないものがある。

「気のいい奴」「悪気がない」等々のような場合の「気」だ。

「気のいい奴」という表現は「憎めない奴」と等価である。まねしようと思っても、できない。さりとて、まねしようとも思わない。無視することもできないし、尊敬することもできないが、「気になる」存在で、その前に立つと「憎めない」。

無邪気なのだ。イノセントなのだ。

だから「気のいい奴」の「いい」は、「善」でも、「良」でもない。そういう二項対立には当てはまらない。要するに「参ったなあ」とカブトをぬがされてしま

うような相手である。

大いなる愚者かもしれない。大いなる知患者かもしれない。

このような「気のいい奴」は、寓話のなかに描かれているのがふつうである。俗なる社会にしながら、聖性をもっている。いばらない。その大愚がこの世の小賢しさを照し出す鏡になったりして、気ぜわしきのなかに、ふと気を静めるようなきっかけを与えてくれたりするのである。

「悪戯」は「いたずら」と読むが、「いたずら」にもさまざまあつて、「気のいい奴」の「悪戯」は大目に見てやる文化もある。幼児の「いたずら」を「おいた」と表現するとき、そのまなざしはきつくはないはずである。

意のままにならぬ気

「気」には、意のままにならぬ面もある。「気に入る」が、「気が乗る」かは、本人の「気持」しだいだとはいえない。何がしか原因は自分以外のところから来てい

る。

「短気は損気」。「気質」や「気性」は、自分でコントロールできるようでいて、実はそうやすやすとはいかない。「気質まる出し」の人間に出会ったら、どうしてこんななのだろうと、それこそ不気味になる。何か邪気か本人に乗りうつっているのではないか。憑きものがそうさせているのではないか、と思えることだってたくさんある。

近代社会は、そういうデモニッシュな、超自然的な力を何とか手なづけようとして、別の「キ」を考え出した。「気」ではなく、「期」である。

たとえば「反抗期」。

それは、「気」よりも分類に気をつけている。しかし、暗黙の仮説がある。一つは、「反抗期だから仕方がない」と冷静に構えよ、という指令である。時には、「仕方がない」が「打つ手がない」になり、「あきらめよ」という暗示になったりする。もうひとつは、「ある一定期間が過ぎれば直るだろう」という予想である。こ

の指示は、時には「慰め」にもなり、気安めにもなる。

でも、「第一次反抗期」だの、「第二次反抗期」だの、いくつも案出されると、気が気でなくなるのも人情というものである。

学問的な用語としての「〇〇期」も、「気」の世界をうしろにひきずっている。少なくとも、日常場面から見れば、そういう気配がする。

「気に病む」ことはよくない、と忠告されてもなかなか止むことはない。「気にするな」と言われたことが、かえって「気にかかる」からである。人間は、そう気骨のある人ばかりではないからである。

むら気

対極には「むら気」がある。「むらぎ」と濁る。こちらには「気に病む」とくらべると、場当り的で、気移りする。ひとつのことにこだわらないで、つきつきと対象を変えていく。「気が散る」とも違っている。「気が散る」のは、少なくともなにかひとつのことに集中しようとす

る構えが一方にあって、それと葛藤する形で生まれてくるのであるが、「むら氣」は、葛藤など初めから捨てている。

かかわる相手は数が多いし、種類もさまざまだ。多数で、多彩なのである。したがって、これらとていねいにおつき合いしていたのでは気が重くなってしまふ。つまり、表面的に、浅くつき合うのだ。

すぐ飽きてしまふ。

愛用の玩具とか、愛読書とか、「愛」と名のつくことではない。相手に対しそうであるなら、自分に対してもそうである。時間をかけて発酵してくるといふようなことに対しては「気が向かない」。

「むら氣」のうしろには瞬間性がひそんでいる。瞬発力ばかりあって、持続力がないのに似ている。ことばが多く消費されているのに、意味は交流されていないおしゃべりに似ている。

「氣分屋」である。

おとなにも、子どもにもいる。いや、「氣」という観

点から見えていけば、おとなと子どもの境界線は相対的なものになってしまい、子どもっぽいおとながいたり、おとなっぽい子どもがいたり、年寄りじみた青年がいたり、若者じみた老人がいたりするのがよく見えてくるような気がする。

しかし、「気がする」だけでは不十分だから、「氣」の微細なムードについて考えておかねばならない。

気がまえ

「氣」には心身未分化、主客未分化というようなレベルの用法がある。しかし、微妙なのは、自分とかわりをもっている対象とのあいだで生じる。対象が人であったり、擬人化されたものであったりするが、対象と自分のあいだで、〈こちら〉と〈あちら〉が明確に区別されていないで、対象の方がある作用を及ぼすのである。

「氣配」を感じたり、「殺氣」を感じたり。逆に「氣勢」を挙げたり、「氣合い」を入れてみたり。

いったい掛け声というものはどういふものなのだろ

う。それは、自分で自分に向けている「氣勢」であり、「気合い」である。同時に、明確に正体はわかってはいないが、あたりに聞かせるためのものでもある。

「ガンバルゾ！」という氣勢。「ヤルゾ！」という掛け声。「ファイト！」という氣勢。「元氣を出せ！」という掛け声。みな、この構造をもっている。あたりをつん裂く裂帛ちぢやくの気合いにしても、静かに氣を落ちつけるための深呼吸にしても、みな「氣」を様式化したものである。

氣の果てに

日常の場面では「氣」は通貨のように磨り減らされている。表面はツルツル、スベスベになっている。だから以上のべたようなことは削りとられてしまっている。人びとは氣兼ねなく、氣遣いもせず、「元氣」だの、「氣の毒」だの、「氣になる」だのを平然と使っている。「氣」が制度化されてしまい、「元氣を出しなさい」が日常的に頻繁に使われるに及び、かえって「元・氣」の方が氣にならなくなってしまう。

そして、「氣」の多くは、何の氣なしに使い捨てられ、交換されたりしていく。

その一方で、ヨーガやエアロビックスが人びとの氣分を変えている。

「氣」は、あるときは表層で気軽にはねまわっている。しかし、あるときは雰囲気として人にまつわりつく。

「氣」は本来的に分類されるのを拒んで、「天地の氣」にまで広がり、子どもを通してその片鱗を見せてくれる。

「みんな仲良く、元氣な子ども」。ホントはそうでないからこそ、そういう標語や呼びかけが必要になるのかもしれない。「元氣」ひとつとってみても、そのあらわれ方は場面ごとに異なっている。「元氣な声で返事をする」という時の「元氣」は、瞬発的なものである。が、「元氣よく歩きましょう」は、持続力の方であろう。「元氣に遊びましょう」の「元氣」は、伸び伸びの場合もあるうし、力いっぱいの場合もあるだろうし、自己コントロールを巧みにやって、という場合もあるだろう。

こういう違いをいちいち氣にしていたのでは氣が減入

ってしまつて、気疲れがするばかりである。そこは、それ、雰囲気や気分がものをいう。こんなことをいちいち気にかけなくとも、ちゃんと私たちはおよそそのところを読み解いているのである。

それも「気」のはたらきのゆえかもしれない。「人の気も知らないで」と怒る必要もない。「気をもむ」ことも、「気にする」こともなしに、気分よくその気になつてやっている。

これが日常だ。しかし、日常のほころびの向うに、ちらと姿をあらわす「元・気」の何やら気になる世界がある。効率だの、投機だの、因果関係を単純化することに価値があると思ひ込んだ考え方が隠してきた多次元の世界だ。

日常のほころび。それをもたらすのも子どもである。彼らは、さまざまなやり方で人の気を引こうとする。雰囲気を読みとり、気分に応じて近づいて来たり、距離を置いたりする。気安めを言い、気になることをしでかす。

しかし、彼らが見せてくれるのは時間の形である。時間とともに変わっていくふしぎな存在。彼らとともに〈こちら〉までが変わっていき、向かい合ったり、並んだり、支えてもらつたりして歩いていく。えたいの知れぬ面をもち、〈こちら〉の気を引き、〈こちら〉に挑戦してくるように。

その多様な面を「気」はホログラフのように描き出している。

気骨、気品、気っ風、もそのような過程から生み出される。

(名古屋大学)

八月・たより

清水 光子

保育者と一緒でなければ何もしない、遊ぼうとしないU君は、泣きもしないでT子と一しょに私の両側にくっつききりで一学期を過ごした。M君は砂場が好きで、一日中砂場に没頭しており、雨の日は廊下で外を見たり友だちの遊ぶのを見ているが、殆ど話はしない。保育者のことばかけに、短く「うん」とか「いいよ」とかの答えは返ってくる。Y君は気がつくとき指をしゃぶっている。ことばで訴えないで、まず泣いてくるCちゃん。「このお手々いいお手々よ」と〇くんの手を賞めながら、たたかれたSちゃんを慰める苦しさ。など、などの夏休み前だった。

夏休みに入って一学期の反省やらお休み中のあれこれをし、或る解放感と自由感を持ちながらあちこちの研究会や勉強会に参加もした。そして八月。聞き慣れた子ども達の歓声

(必ずしもそうばかりではないものの)から遠ざかった十数日、何か物足りなくて、研究会でのあのことを早く子ども達と一緒にしたい、あのうたを歌って踊りたい。あのお話を劇みたいにしたいなど、心に湧き起こる衝動のようなものを感じる保育者の八月。

下のお子さんが四月から入園した○さん。午前中は誰もいない私だけの家、自由な時間!かといって決して子どもを案じないのではなく、かえって、今頃友だちに叩かれて泣いてるのではないか、間にあわなくておもらししているのではないかとか、限らない親の取り越し苦労をしていた日々。今は子ども達が我が目の届くところにいる夏休み、八月のお母さん。

保育者も親も休みらしい生活のリズムが出来てきた。人間って勝手なもの、変化を好むというか、同じ状態を続けることはきらいにできているらしい。それでこそ進歩があるのかも知れない。自らを新あらたにする努力、と倉橋惣三先生が言われたのはこのようなこと、そこに楽しみを見出せることもかも知れない。そこで保育者は、小さい恋人達にせせとラウレターをかく。旅先で買った絵葉書、野の花を押し花にした葉書、得意のイラストで自画像を描いたり、子どもと一緒に種まきをした朝顔の赤い花の写生をしたのだったり。「子どもの気持ちって、ごく深いものよ」と先輩の、文学者であり保育者であった先生の言葉を思い浮かべながら、老子の「上善は水の如し」子どもの気持ちはそうなのね、など独りうなずきながら。ひとりひとりに語りかけるように、目の前にまなざしをみつめているような思いでかく。けれど、ことばは簡単に「お元気?私も元気で、泳いで黒くなりまし

た”〇〇山へリュックを背負って登ったの、うぐいすが鳴いていました。もつと登って天べんについたら海が見えたのよ!”などと。

返事が来るのである。何と! 仮名と覚しき字にはお母さんから解説がついている。象をのみ込んだウワバミの絵”かしらとみえるのにも解説つきで。こうした解説つきをよこしてくださいる親御さんの心がありがたく心に響く。胸を熱くして何度もよみ返す。お母さんや、まれにはお父さんの手蹟の添えがきにお子さんの近況が報じられて、うれしかったり安心したりする。〇子はもう園に早く行きたいと言います”「これ、幼稚園に持っていくんだ」とあき箱で何だか作っています。などと書かれていると、”私も早くあなたに逢いたいよ”と心に叫ぶ。恋人達に逢いたい熱い想いをこらえて、それぞれの声音、しぐさ、表情を目に浮かべて恋を楽しむのである。水遊びが好きで唇を紫色にして、いくら出ましようと言ってもきこうとしないM君が、泳いでいるという海の絵を送って来た。お母さんの手蹟で、”残り少ないお休みを一ぱい楽しみたい。”とあつたうれしさ。

子ども達は、大体水が好きのようである。海でも川でも池でも、小さな水溜まりでも。だからこそ危険を防ぐ必要がある。それは大人の役目である。生命は水辺から生まれたのである。自然に対して恐れて近づかないのではなく、近づいて知って畏れる。森でも山でも岩でも鳥でも獣でも何でも、自然とのつきあい方はそのようなやり方もあるのではないかと思っている。

水について言うと、孔子さまが水を話に引いて弟子を指導されたとある。「水は必ず低

きに流れる。曲ったりくねったりしていても常に一定の道理に従っているのだ。その点『義』を備えているかのような。水は湧き出て尽きることがない。この点で『道』があるかのような。堤を切って放流させると、深い谷底にもとび込む。恐れないという点で『勇』があるかのような。どんな狭い処にも浸透する。この点は『洞察力』を持つに似ている。汚れたものを洗い落とす点は『感化』ということにそっくりだ。だから君子は川を眺めることを好むのだ。」と。(森本哲郎 「ことばへの旅」より) 人間の本性の源に、水との関わりの深さを想うのである。

とまれ、八月の身辺の自然は確実に秋に向かって傾いている。七月のあのキラキラと照りつける太陽はどうしたのかと、訝りたくなる日射しを感じる日がある。目を瞑つむっているのに……耳をふさいでいるのに……云々の詩のように絶えず廻っている地球。木々はもう来年の新芽を用意しているし、野原にはひっそりとおみなえしや赤まんまが蕾をふくらまし、バッタやキリギリスの幼い子がかくれんぼをしている。

〃月後れのお盆に田舎に行つて、T男は姉と燈ろう流しを見ました〃Uは私の故郷の夏祭りでおみこしをかつかせて貰い、あの泣き虫の得意気な顔をおみせしたいと思ひました。〃夏の終わりの花火大会、ほんとうにきれいでした。家で、1kmほど離れた、海へそそぐ川の橋から眺めました。言葉では表わせない美しさでした。〃斯うした便りが届く度に想うのは、子どもの心の中にこの夏が育んだもの大きさである。大人が幼い時の思い出を語るとき、きつと出るのは自然の姿である。子ども達はその時、実体験で得たも

のをしっかりと貯めこんでいる。山の大杉であったり、黒い影のような老松であったり、キラキラ輝いた水紋であったり、魚鱗であったり、又はお祭りの夜店の匂いだったり。

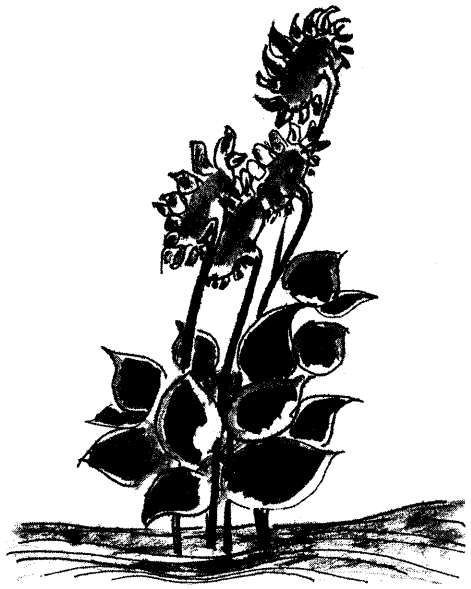
よられつる 野もせの草のかげろいて 涼く曇る夕立の空

西行

はげしい雷雨、青い稲妻の不気味さ、雷鳴の恐ろしさ、オズの魔法使いの映画をみていてしがみついたA子は、虹が出たとき思わず声をあげた。オーバー・ザ・レインボウのメロディが心のどこかにひびき残っているかも？

夕日遠く 金にひかれば群童は 眼つむりて斜面をころがりにつけり

斎藤茂吉



南の島の子どもたち(3)

父と母と子の間

浅野 恵美子

○父親不在か母親不在か

父親の心理的不在が子どもの育ちに与える影響については、日本全体が既に社会的実験ともいえる経験によって認識するようになったと思う。その結果、父権回復を主張する向きも現れたが、強すぎる父権も父親不在と同じように子どもの性格に暗い影をなげかけるものだ。強い父権が、母親不在を作り出すのである。要は、父親と母親が互いに大切にしようことができ、共に育ち合う関係をつくっているかどうかが決め手となる。

私は、教師として短大生と親しくつきあい出して十二年である。彼らとの付き合いによって、父と母の間のチームワークが家族の雰囲気を作り、その関係において彼女たちが引き受けた役割が、彼女たちの性格を育てているというのが見えてきたと思うのである。

ところで、沖縄の場合、父親が仕事におわれて家庭を顧みることがないという現代的な意味の父親不在もないわけではないが、それ以上に離婚による父親不在が目立っている。沖縄での離婚率は、全国一であり、昭和六十

二年の沖繩県の調査によると、母子家庭の数は全国平均の二・二倍、未婚の母の数は二・四倍もある。

離婚が多い理由については、様々な考えがだされているが、離婚は、男と女が学びとる必要のある重要な発達課題を内包している。今回は、沖繩をバックにおきながら、学生たちとの共同研究や母親たちから学んだ事等を通して、父（男）と母（女）の間にある課題について考えてみたい。

○離婚に寛大な沖繩の文化的風土

はじめに、沖繩の風土と歴史について触れることが必要だ。沖繩は、一つには、亜熱帯の風土が沖繩独特の社会的性格を育てた。ウチナンチューは、沖繩で育った私自身そうであったが、明らかに計画性が弱い。風の吹くまま気のむくままというところがある。年中温暖な気候である為、未来の為に備えるということがさほど必要でなかった生活からきているだろう。自然まかせや成り行きまかせの生活感覚がある。

二つには、大和の封建社会という歴史的経験を沖繩の社会は経験しなかった。古代的社會から近代社會へと外からの近代化が進められた。その長所は、縦社会的な窮屈さがなく、他の県と比較すると横社会的であり、ある意味では自分らしく生きることを許容する社会的雰囲気がある。沖繩に住みついた他府県人も、沖繩の生活に慣れてしまうと本土の自分の故郷に帰って緊張してしまうというからおかしなものだ。反対に、本土から沖繩に帰省した人々は、沖繩に帰ると故郷に戻った安堵感を覚え、本土にもどりがらない。

三つには、昔からの沖繩のまじしさは、男も女も共に助け合って働く良い習慣を育てた。共働きは、きわめて自然に受け入れられている。沖繩も男社会ではあるが、経済力を持つ働く女性は自立できるのである。

四つには、沖繩は地縁、血縁が強い社会であり、親族の相互扶助がある為、失業率日本一といわれながら、生活苦をおおらかに受け止める条件がある。

五つには、復帰によって福祉制度の奥恵を受けること

ができるようになり、加えて女性の人權を積極的に認める考え方が普及してきた。

以上のような要因が離婚を許容し可能にしている。離婚の自由は当然保障されるべきであるが、離婚には、様々な問題や困難もつきものなのである。

○復縁を迫った男のこと

私が、沖繩の男（それは女の問題でもある）の持つ問題、自我の弱さを意識しだしたのは、復縁をせまってもとの妻を殺害した男の事件に出会った時であった。

その男は、生活費を妻にわたさず、遊びほうけて家庭を顧みることがなく、妻の再三の抗議にも生活態度をかえないことから妻の要求で離婚した。しかし、離婚の意志がなかった彼は、別れた妻のアパートに何度もおしかけ復縁を迫った。妻が応じるはずはなく、口論の末、カッとなって、包丁で妻を刺し殺した。警察につかまったら彼は、罪の意識はなく、彼女が自分のことを自分の母親にまでいいつけたのでカッとなったと答えている。

この身近に起こった事件の新聞報道に接して、別れた妻を殺して罪の意識がないということはどういうことか理解できないと思った。そこで、学生たちと一緒に大学祭で、実際に場面を組んで、行為法（ロールプレイ）で演じながら考えてみた。

場面1：復縁を迫る男とそれを拒否するもとの妻の対話

場面2：男の母親ともとの妻との対話

場面3：警察にいる男と男を責める亡き妻の友人

これらのロールプレイと討論によつてはつきりと見えてきたことがあった。それは、この男は、甘えが強く子どものような感覚でいるらしいということであった。まじめになるとかやりなおすとか言うだけで受け入れてもらえると考えている。妻の方は、ききあきたセリフだといって取り合わないという関係である。この男は、現実のきびしさを受け入れず自分のやる気（動機）だけで、実績を示すこともなく自分を受け入れさせようとしていた。妻は、母親のように自分を支え、応援する存在でな

ければならないと感じていたのである。妻が独立した人格であるということがわからないのだ。女性を自分の手段としてしか認めることのできない幼児性があった。だから既に離婚しているという事実をふまえることができない上に、人を殺したという罪の意識が成立しないのである。現実に合わせて、他人の厳しい目を意識しようとしていない幼児性がこのような重大な事件をひきおこしたのであった。そして、このような幼児性を育てたのは女であ



るといふことを考える必要がある。この男の父親のことはわからないが、はっきりしていることは、この男の心の中に父的なきびしさが機能していないことであつた。母親中心で育てられたと思われるのである。

○妻の夫からの自立

こんな犯罪は、何処でも起こりうることはあるが、母親中心の育児は、こういう未熟さを育てる危険がある

ということである。実際、これほどではないが似たような子どもっぽい男性の事例は身近に存在しているのである。家庭裁判所の側からも「女が経済力を持ち、生活の基盤がしっかりしてくるにつれて、男の方は逆に怠け者になっていき、働かず、女に寄生するような生き方へのめりこみ、女性（妻）との間でトラブルを起こすことは、特に沖繩でしばしばみかける生活破綻のパターンである。」（広文堂「沖繩の文化と精神衛生」の中の郷司幸男氏の論文より）と指摘されている。

男は女より偉いという男社会的な考え方は、偉くなれなかった男の自己疎外を育てていくのである。そして、女たちは、納得いかない男のあり方について行かなくなった。女たちの自我が目覚めたのだ。女の目覚めに応じて男たちも変わっていくことが必要だ。子どもの育ちにとって、女（妻）の目覚めは大変重要なことであるということをお母さんに教えてくれた母親の体験を紹介しよう。

その母親は、思春期の娘の性的な非行に悩んだ。彼女

は、いろいろなことを試みたが、娘の非行は治らない。悩んだ末に、自分自身のことを振り返った。夫は、知的でニヒルな雰囲気を持っていて、それに惚れて結婚した相手である。惚れた夫の好みの女性になろうとがんばってきたが、自分のがんばりは何であつたのか。自分を出すことなく、いつも夫の顔を伺って伸び伸びしていなかった。その為、夫の横暴を許し、家庭の雰囲気を悪くしていると気づいた。離婚された方がいい、自分らしく生きよう。自分が自分らしく生きることが娘に何か言う前に必要な事なのだと悟った。こうして、彼女の夫への反抗が始まった。妻の決死の反抗に、意外にも、夫は、驚き、耳をかたむけ出した。自分だけが何でも知っているとばかりに高慢になっていた夫は、妻のいいぶんに一理あることを認め始めた。そして、自我を主張しだした自分の妻をみなおした。当然、家庭の雰囲気は変化し、対話のある家庭になった。

娘は、この雰囲気の変化の中で、自分を回復し非行から立ち直ったそうである。彼女は、娘の非行をきっかけ

に、夫から自立したのである。

○母子家庭と子どもの育ち

この母親の体験は、夫婦の発達の歴史の一般共通的なひとコマでもあると思う。子どもを育てることは、実際に自分を育てることであったのだ。子どもは、父親と母親の関係の葛藤を通して、人間のあり方をも学ぶことができたのである。父と母がいて、共存の必要があったからこそ、葛藤も共存のすばらしさもわかるのである。ではそのような葛藤がない母子家庭の場合は、どうなのか。母子家庭で育った私の学生たちの場合について書いてみよう。

私の学生にも、母子家庭で育った人が結構多いのに驚いたが、沖縄の離婚率の高さを考慮すれば当然のことであった。ある学生などは、自分が未婚の母親の子であること、父が誰か知らないこと、母が言いたくなければいわなくてもいいと思っていると話してくれた。その彼女は、大変ひとなつっこく、やさしい子であった。

又、ある学生は、興味の湧くことは、良い成績を取るが、興味が湧かないと極端に課題にとりくめないところがあった。その為、彼女はとうとう望まない留年をし、保母資格も取得することなく卒業していった。歌がとてもしょうずで、余興の席のスター的存在であり、暖かい心の持主であっただけにとても気の毒に思ったものだ。彼女の場合は、自分に合わせることはいきいきとやれたが自分の意向に沿わない周りに合わせる事が基本的に苦手なのであった。

哲学学生と呼ばれ、大変優秀であった母子家庭育ちの学生もいた。彼女は、一人の教師との人間関係にまずまずいて、レポートを書くことができず、頭の中では、課題内容についてたくさん考えることができていたにもかかわらず、その一つのレポートの為に留年するはめになった。彼女は、その教師を受け入れることができなかった。彼女に合わせようとしなかっただけであった。彼女は、知的な学生であったが、話を始めると相手を抜きにどんどんすすんでしまったり、人との話がはずむと、

約束して待っている人の事を考慮できないのであった。自分の考えをしっかりと持っていたが、現実的に行動しないのであった。

母子家庭で育った学生は、非常に暖かいものを持っていて、いる場合が多いのだが、このように、自分に合わせる事が上手で人や現実に合わせていることが苦手な場合がしばしばみられたのである。

ただし、生活苦を引き受けている場合は、様子が違って来る。母子家庭であって、母親の片腕として生活苦を引き受けていたある学生は、他の学生と比較すると大人っぽく男性的に育っていた。彼女の場合は、現実的な行動力は、抜群であった。

一口に母子家庭といっても、彼らの育っている関係はいろいろであって単純化はできないのだが、結果としてみれば、現代の生活においては、母親だけで育てると、性格的なかたよりができてしまいがちである。

○人類の発達課題

離婚、それはできれば子どもの為にも避けて欲しいことである。しかし、男と女の葛藤を通して、何かが学ばれてくるとすれば、過渡的な不幸かも知れない。

父が母を受け入れることができない場合も母が父を受け入れることができない場合も同じ問題が存在しているのではないか。それは、他者を受け入れることのむずかしさである。

我々は、自由な自分性、子ども性をなくしてはならないが、同時に自分とは違う他者をも受け入れていかねばならない。さらに、自分の主観を越えて厳然と存在している現実、事実性と付き合うことも必要である。人は、自己と人と物とを共存させた時に本当の自由を得るのである。

子どものような心は、うまくいけば暖かさややさしさに通じていくが、悪くすると自己中心から他者を殺すという犯罪にも通じてしまうのである。

南の島のおおらかさは、子どもの的、自己中心的な自由さである。それは、ステキなことでもあるのだが、それ

だけでは不十分なのである。北の寒さや厳しさ（現実性）も学ばねばならないし、他者性も学ぶことが必要である。他者性を許容しない子ども性は、自分をつぶすか他者をつぶすかという矛盾をはらんだ未熟な豊かさにはすぎない。我々の内に組み込まれている自己中心性 \parallel 他者排除性を自覚せねばならない。

自己と他者との共存共栄には、他者を他者として受容することがどうしても必要なのである。私たちが希望し



求めている地球の平和というものは、この人類的な発達課題をのりこえることで作られてくるのではないか。

男と女（父と母）が共存共栄を育てるところから、共存共栄を育てようとの意志を持つところから、共に育てあえる方法を学んだところから、平和がつむぎだされていくのである。それは、健康な心の子どもが育ってくることでもあるのだ。

（沖繩キリスト教短期大学）

別のクラスの担任になりました。もっとも、一時間半程（午睡とその後の時間）抜けさせてもらい、その間は主任先生に補ってもらっています。四月にスタートする前は、ほんとうに私に出来るのかしらと不安もありました。責任の重い仕事をやりとげることが出来るだろうか、また家の仕事や家族の世話もうまくやりこなすことができるだろうか心配でした。

今はもう五月です。子どもとの生活も一か月が過ぎました。夢中に過ごした一か月ですが、毎日、ひとりひとりの子どもとの生活（体験）の積み重ねです。保育園は時間が長いのです。私は朝八時半に来て、帰りは掃除と反省会が済むと六時半近くになります。そして保育日誌や記録づけ、教材研究や翌日の保育準備は家に持ち帰ることになります。今、連休を迎え、やっとゆっくり子どものことや、私の保育をふりかえる余裕が得られました。この一か月の確かな手応えを味わいなおしたいと思います。

一、四月一日

私のクラス（ファミリー）は、五歳児六名、四歳児十二名の縦割クラスです。四月一日の第一日目。子どもはそのままを私に投げ出してくれているようで、クラスの先生の実感をさっそく味わいました。昨年度はフリーの先生でしたが、やはり違います。私は、この子ども達と別れる時どんな思いになるのだろうか、耐えられるだろうか、一日目にしてそんな取り越し苦労をしました。

二、四月八日

(i) 前日の夕方、私の二歳の子どもが足を怪我し、夜中にひどく痛がり、この朝、私は病院へ連れて行きました。十時までかかり、朝の子どもの受け入れと遊びを、主任先生にしていたきました。私はやむをえないと思いつつも、クラスの子ども達に申し訳ない気持ちでいっぱいでした。お集まりが終わった後で、私はクラスの子ども達を集めました。ところが四歳女兒のMとEがいまぜん。私は「MちゃんとEちゃんを探しに行こう」と言

うと、うれしいことに、私の促しで電車のようにみんなが連なり、探しに行ってくれました。二人は二歳児クラス先生の机の下にもぐっていました。私「見つけたい」と言う。ところが、他の子ども達が「どうしてここにいるの」「りす組さんになっちゃうよ」と、二人に強い口調で言うので、二人はますます出て来れなくなりました。私「今日も楽しいもの持って来たの。Eちゃんも貼って」と誘う。やっとのことで二人は部屋に入ってくれました。何日か前から、毎日、壁面に木を作り、その木に名前のついた花や果物を、座席シールのように貼る活動をしていました。この日、私は、小さなりんごを色画用紙で作り、Eにも木に貼るように、名前のついたりんごを渡しました。ところがEは、そのりんごをねじって破ってしまいました。私はあまりのことに、思わず泣き出してしまいました。「せっかく先生が作ったのに」Eはなんとも言えないきつい目をして、顔をそらしてしまいました。

(ii) 昼食の時間になり、子ども達は食事の準備にお遊

戯室に行きました。ところがMとEは自分の部屋のままごとコーナーで遊んでいて、何回、食事に誘っても「食べない」と言います。私は主任先生に、午前中の出来事(i)もいっしょにこのことを話しました。先生が二人と何やら話された後、二人は先生の促しで私の所へやってきました。Eは「恥ずかしかつたの」と言いました。私は思わずEを抱きしめ、何か言ったようです。しかし言葉は不要です。私は、Eが自分の気持ちを素直に表わしてくれたことでもう充分でした。後で主任先生は、私を作ったりんごを破った自分の行動を恥ずかしく思ったのだと言われました。私はEの心の多感さ、繊細さに「こわいな」と思いました。Mも次に私の所へ来て、「おなかすいてるの」とほんとうの気持を言ってくれました。私「そうだったの」と抱き上げ、三人で食事の準備に行きました。

(iii) 五歳男児のHとTも、ファミリーで集まる時と、食事の時にいません。私が探すと、お遊戯室の押し入れの中に隠れていました。私が探し出すと、喜んで出て来

ました。

私はお昼寝の前、かくれんぼを提案しました。私が鬼になり、子ども達がかくれます。押し入れに隠れる子どももいますが、お友だちのふとんに隠れます。私は頭や足や手に触って、その子どもが誰かを当てます。当たった時ははずれた時も、先生にひとりずつ触われ、みつげられることはうれいようです。みんなは大喜びします。

子どもの心を掴むことは、ほんとうにむずかしいこの日、思いました。子どもがみんなとはずれたことをしたり、隠れることが、私の愛情を求めていることであつたりします。お昼寝前のかくれんぼをみんなが喜ぶのも、ひとりひとりだれもが自分をつかまえてほしいという欲求の現われです。この日の午後のおやつの後、私はお遊戯室の片付けをして部屋にもどってみると、何も言わなかったのに子ども達がいすを並べて、連絡ノートを配ろうとしていました。これまで私がしてきたことを自分達でやり出しました。先生とひとりひとりのつながり

が、またファミリーのつながりやまとまりになっていくのでしよう。

Eのこの日の出来事は、私には忘れられないものとなるでしょう。その後のEは私に対してつっぱった表情を見せなくなり、むしろ私の肩を持った発言をするようになりました。

数日後のこと、午睡の時に、私がEの隣の子どもを寝かせつけていると、Eがそっと私の手に自分の指を当てます。私はEに背を向けているのですが、そのままそつとEの指を握りました。Eも私も、正面から向き合うには抵抗がありました。しばらくして私ははじめてEの方を向くと静かに寝入っていました。

Eと私のつながりは深まっていき、遊びの中でも私でなければと要求してきます。また私が用事でEよりも早く帰る時、グローブジャングルのてっぺんから大きな声で、私の姿が見えなくなるまで「さよなら」と言い続けていました。

三、四月二十一日

私は、年齢別活動の日は四歳児を担当しています。この日は私のファミリーの四歳児を活動する日です。リズム遊びをみんなでした後、外遊びをしました。食事時間になり、片付けをしてお遊戯室へ行くように子ども達に言いました。ところが四歳男児三人は、何回言っても遊びを切り上げることができず遊び続けています。みんなはもう食事の準備がすっかり出来ているのに、まだ来ません。私は業を煮やし、「そんなに遊んでいたからお昼、食べなくてもいいわ」と言い、部屋へ入りました。他の先生方とも、どうなるか様子をみましょうということになり、それ以上何も言わず、三人の好きなようにさせることにしました。三人は何ということもなさそうに、楽しそうに遊び続けていました。さすがに二時半になると、疲れがでてきた子どももいました。私は外に出て、「先生にお話がある人は言いに来て」と声をかけました。するとひとりがやって来ました。私はその子どもをひざに乗せました。その子どもは、「言うことを聞

かないでごめんなさい」と私に言いました。もうひとり、自分たちの使ったおもちゃをしきりに片付けています。片付けないと思っっているようです。その子どもは気持ちのやさしい子どもですが、気が弱いところがあって、他児に引っぱられてしまうのです。あのひとは、私が声をかけなかったらずっと遊び続けていたかもしれません。私の言ったことなどへっちゃらです。私の子どもの場合には「好きにしないさい」「かかってにしないさい」と怒って言うのと、かえて自分の思い通りにしないものです。ところがこの三人には、これが通用しないのです。

今、私の言動を思いかえすと、好ましくない対応であったと反省します。四歳児の活動がもっと充実し満足できていたら、遊びの切り上げも早かったかもしれない。また、ただ遠くから「お食事ですよ、早くいらっしやい」と声をかけるのではなく、子ども達の方へ出向き、その遊びのおもしろさを感じてあげられたら、こんなにこじれなかったはずです。また、私の「そんなに遊ん

でいたかったら、お昼、食べなくてもいいわ」という発言を、子ども達はそのまま受け取り、食事を食べさせてもらえないと思ったようなのです。私の思いと子どもの気持ちもすれ違っています。

この三人のように、次の行動へ移る時、なかなか切り上げられない子どもがいます。私はつい、「早くして」「待ってるわ」と言いますが、これ位ではだめです。こんなことが一日のうち何回もあります。その度に、せかしたり、期待を持たせるような発言を考えて誘ったりもしますが、毎回だとうんざりします。ある子どもは、たまたま最後にならずに食事の準備ができると、「早く食べようよ」と催促します。いつもお友だちを待たせている人が身勝手です。ところがこうした子ども達が、「川上先生と食べようと思わずと待っていたんだ」とか、「先生に作ってあげた」とプレゼントをしてくれたりします。

身勝手といえば、友だちをボンボンとパンチをするくせに、人からやられると泣きべそをかいて私に訴えに来

ます。しかし、こんなこともあります。ある子どもが泣いていて、泣かせた子どもがわかると、「許せない」とその子どもをたたきに行こうとします。その子どもへの訳があるのでしょうが、自分本位、自分勝手と思える行動をとる子どもが、どのようにして相手のことも考えてあげられるようになるか、今後の成長の過程を楽しみにしています。

四、四月二十七日

私のファミリーの四歳児十一名で、こいのぼりの製作をしようと思いました。部屋に集まるように声をかけ、部屋の中央に一畳のカーペットを置いておきました。すると二、三人の子どもがカーペットをとびこえる遊びをし始めました。私もとんでみました。それから少しずつカーペットの長さを長くして、みんなで交互にとぶことになりました。私の促しでみんな靴下を脱いで裸足になりました。みんな楽しんでいるうちに、遅れて入った子どもも加わりました。その後、床に三色のビニールテ

テープを貼り、色鬼のような遊びになりました。次に私は、白い紙を床の上に散らし、ピアノが止まったら、紙の上にはみ出さないように乗るゲームをしました。楽しんで後、子どもの足型をその紙にえんぴつでとる活動をしました。二、三人の子どもは出来ました、その他の子ども達は私が書きました。子どもはくすぐったそうでした。次にその足型をクレヨンで塗るように言いました。子ども達はそれぞれに塗り始めました。私は、「みんなの足でできたこいのぼりを作るのよ」と話しました。前日、別のファミリーの四歳児が作ったこいのぼりを見せました。すると、子ども達の中から、ワーというどよめきがありました。塗り終えた子どもにははさみで切るように言いました。ところが女兒Eは、いい加減な切り方をしています。Eはうまく切れるはずなのに、いやいややっている様子です。女兒Mも途中で止めてしまふ。私は理由を聞くけれど、「明日する」と言います。MとEは絵は描きたそうなので、私は余った紙を渡しました。するとEとMは、その紙を半分にして細長くし、

きれいな色で幾何学的な模様塗りに塗りました。

この日の設定活動で、私はいくつかの点を教えられました。私は設定活動をする経験が乏しい。子どもが楽しく意欲的に取りくみ、また子どもの満足感を与える活動にするにはどうしたらよいか、子どもに向う前、いろいろと頭を悩まします。しかし、今日の何げなく置いておいたカーペットを、子ども達がとぶという動きから、次から次へと思いがけず遊びが展開していきました。ゲームも盛り上がり、最後に紙の上に裸足でのる活動も無理なくできました。導入はうまくいったようです。設定活動も、子どものその時の気持をくみとり、方向を作っていかなければ、子どもの意欲は生まれてきません。先生の目的にただ子どもを引っぱっていきこうとしても、子どもはやらされている思いで、自発的な活動にはなりません。さて、私がこいのぼりの出来上がりを見せた後、MとEの行動が急変しました。私はその時なぜかわかりませんでした。しかしその後、二人が楽しく描いた絵を見てやっとわかりました。子ども達の足型でできたこいの

ぼりは、素朴で力強く、私にはすばらしく思えました。ところがMとEにとつてのこいのぼりは、きれいな色で塗られた、ひとりで作るこいのぼりだったのです。二人のこいのぼりのイメージは私の思いとかけ離れていて、作る意欲がすっかりなくなってしまったのです。MとEは、「わりばしと糸をちょうだい」といい、私も用意しました。翌日は、切った足型を、腫の部分だけのり付けして鱗とし、全体をえのぐでぬる活動を予定していました。翌日、二人はこの活動に参加するのか、それとも自分のこいのぼり作りをさせた方がいいのか考えました。EとMは自分のこいのぼりを作るといふ要求が満たされたからでしょうか、翌日、Aは前日の続きで足型に色をぬり始めました。私の方も、ただ足型をはるだけでは楽しくないと思い、みんなの足型に数字をふり、ゲーム遊びをしながらはって行きました。EもMも参加し、こいのぼりは完成しました。私はほっとしました。ひとりひとりの気持をくみながら、全体で仕上げていくことのみならずかしさを感ぜました。部屋に二メートル近くの大きな

こいのぼりを飾りました。子ども達は「私の足はこれ」とお友だちと話をしています。

「クラスの先生」思っていた以上に手ごたえがありました。生なまの子どもと私との出会い、かかわり合い、ぶつかり合いです。私は子ども（人）とこんなに深い心の通い合いができることは、すばらしいことだと思えます。時に、私の家の調子で「うるさい!!」とどなりたくありませんが。この一年、元気に楽しく明かるく子ども達とすごしたいと思っています。

「夏休みという、学校・社会生活から解放されたとき、子どもは過去を考え直し、反省し、とらえ直して、自分らしさをとりもどすのであると思う。夏休みが終わると、子どもは一步前進し、成長したように見えるというのは、単に海や山に行つてふだんとは違つた体験をしたというだけではなく、子どもなりに自分自身をとりもどす精神作業をしていたからではないだろうか。」(津守真著『保育の体験と思索』P.124)

「夏休みに、別の社会生活のプログラムに追いかけられたら、子どもはまた自分の生活をもてなくなつてしまふ。母親との間のゆつくりとしたつき合ひの中で、幼児は自分自身の生活を最もよくもつことが出来る。母親にとつても、夏休みは子どもと十分つきあつて、ともに考えることのできる機会である。」(同P.127)

私達大人も、ゆつたりとした生活の中で「自分らしさ」をとりもどせる夏休みでありたいものです。少しでも、そのお

手伝いができたらと、今年も緑蔭図書の特集を組み、各方面の方々に本を紹介していただきました。私も緑蔭の名のように、木蔭で、自然の恵みに守られて読書するというぜい沢な夢を、今年こそは実現させましよう。

水不足で悩まされた昨年'87年の夏。でも事態を深刻に受けとめぬまま、今年も夏を迎えたような気がします。

最近、水に関係深い映画を二本みました。「柳川堀割物語」「愛と宿命の泉」、水とつきあうことにあまりにも無関心だったと考えさせられました。蛇口をひねればすぐ水が出るのが当たり前。私達でも、身近だった川が今、コンクリートでふたをされたり、へいで囲まれていたり、水の流れから離れて暮らすようになっていふと思いませんか? こうして水とのつきあい方を忘れていき、知らぬ間に、水の問題はのびぎならない所までいってしまふ気がします。

(Y)

幼児の教育 第八十七巻 第八号

八月号 ◎

定価 四〇〇円

昭和六十三年 七月二十五日 印刷

昭和六十三年 八月 一日 発行

東京都文京区大塚二ノ一

お茶の水女子大学附属幼稚園内

編集兼 本 田 和 子
発行人

東京都文京区大塚二ノ一

お茶の水女子大学附属幼稚園内

発行所 日本幼稚園協会

東京都港区三田五ノ一二ノ一

印刷所 図書印刷株式会社

東京都千代田区神田小川町三ノ一

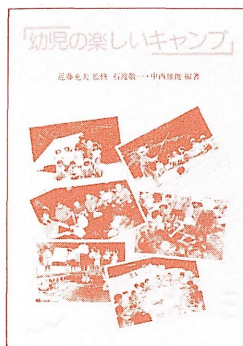
発売所 株式会社 フレーベル館

振替口座東京九一一九六四〇番

◎本誌御購読についての御注文は発売所フレーベル館にお願いいたします

※万一製造不良の点がございましたら、おとりかえいたします。

幼児の楽しいキャンプ



自然豊かな環境の中で、保育者と子どもが共に生活するキャンプは、園生活ではみられない、たくましく、生き生きした子ども本来の姿をみせてくれます。写真で綴る実践レポート。

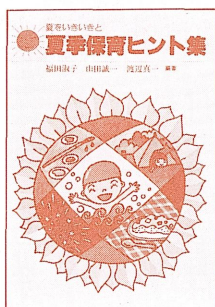


近藤充夫 監修 石渡敬一・中西雄俊 編著 B5判・128頁・定価1,500円

これ一冊で夏の園生活はキマリ！

夏の季節に最適な保育教材のヒント、資料集

夏季保育ヒント集



- ・最近、こどもの経験をひろげるため、夏季のいろいろな保育が活発です。
- ・その指導に必要な、すぐ使えるイラスト入り保育資料です。
- ・すべて実践した園から提供されたアイデア、ヒントばかりです。

- | | | |
|----------------|------------|-----------|
| ●夏季保育のカリキュラムの例 | ●お泊り保育の資料 | ●夏祭りの資料 |
| ●プールあそびの資料 | キャンプファイヤー、 | みこし、花火大会、 |
| ●ゲーム、クイズ、手品の資料 | クッキング、 | 盆踊り、線日など |
| | キャンプソングなど | ●家庭への注意 |
| | | おたよりの例など |

本書の内容より

福田淑子・山田誠一・渡辺真一 編著 B5判・144頁・定価1,700円

くわしくはフレーベル館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社総括部(03)292-7783(代)にお問い合わせください。

子どもの心と明日を考える
キンダーブックの

フレーベル館

新刊!!

全5巻

見る目を育てる 実践シリーズ

- 第一巻 「子どもを見る目」
- 第二巻 「保育実践を見る目」
- 第三巻 「保育計画・形態を見る目」
- 第四巻 「保育の現在を見る目」
- 第五巻 「問題行動と障害を見る目」

保育の本質をしっかりと把握するためには、「子どもを見る目」「保育を見る目」を養わなければなりません。本シリーズでは、実践例を通して、わかりやすく「見る目」を解説していきます。

監修

森上史朗(日本女子大学教授・東京大学講師)

大場幸夫(大妻女子大学教授)

吉村真理子(松山東雲短期大学教授)

全5巻・A5判・平均228ページ

定価各1,700円・セット定価8,500円

子どもの心と明日を考える
キンダーブックの

フレール館

くわしくはフレール館代理店・特約店・支社・支店・営業所または
本社総括部(03)292-7783(代)にお問い合わせください。

